

病理診断科

片岡 恵理 堀田真智子

伏見聡一郎

臨床検査科 和仁 洋治

【背景】 当院呼吸器内科では気管支内視鏡施行時に経気管支肺生検（以下生検）や擦過細胞診（以下ブラシ）、気管支洗浄液細胞診（以下洗浄）を行っている。今回、癌細胞の検出状況について検討した。

【対象および方法】 2015年8月から2018年3月までの期間に生検、ブラシ、洗浄を同時にいい、いずれかが陽性となった176例を対象とした。それぞれの陽性例を比較し、検体採取部位についても検討した。

【結果】 生検、ブラシ、洗浄の全て陽性が109例、生検、ブラシのみ陽性が43例、生検のみ陽性が15例、ブラシ、洗浄のみ陽性が3例、ブラシのみ陽性が2例、洗浄のみ陽性が4例であった。全症例のうち生検陽性あるいはブラシ陽性は97.7%であった。また、検体採取部位を調べた結果、洗浄のみ陽性の4例はすべて上葉肺癌であった。

【考察】 生検とブラシ併用で癌細胞の検出はほぼ可能であり、洗浄は必ずしも必要としない。洗浄併用が必要となるのは、上葉肺癌の場合と考えられる。

4. がん化学療法中に生じたストーマ周囲難治性潰瘍の症例

6階東病棟

○北原 邦彦 石川 暢子

感染管理室

松本由美子

外科

河合 毅 渡邊 貴紀

【はじめに】

直腸がんで化学療法（FOLFOXIRI + ベバシズマブ）を受けた患者が、ストーマ周囲に難治性潰瘍を生じた。医師、皮膚・排泄ケア認定看護師、病棟看護師が協働し、化学療法を続けな

がら治癒した症例を経験したので報告する。

【症例】

60代男性 直腸癌で多発肝転移があり、回腸双孔式ストーマ造設後に、化学療法を開始した。1コース目の治療を受け退院後に、ストーマ周囲に潰瘍を生じ、緊急入院した。潰瘍は、医師、皮膚・排泄ケア認定看護師、病棟看護師が協働してケアを行い縮小した。入院から4週間後にFOLFOXIRIを再開し退院した。退院後は月1回のWOC外来でフォローしながら、FOLFOXIRIを継続した。発症から4か月後に潰瘍は治癒し、ベバシズマブを再開した。その後、潰瘍が再発することはなかった。

【考察】

医師、皮膚・排泄ケア認定看護師、病棟看護師が協働し、銀含有ハイドロファイバーを用いたケアを行うことで、創傷治癒過程に基づく感染コントロールが行えた。

5. AST（抗菌薬適正使用支援チーム）による血液培養陽性例への介入効果

感染管理室¹ 薬剤部² 同ICT³ 内科⁴

○畑中由香子 ^{1,2}	八瀬和佳恵 ¹
大石 博一 ¹	明神 翔太 ¹
長久 剛 ¹	久保西四郎 ¹
遠藤 芳克 ¹	最所 裕司 ¹
邑上 達也 ^{2,3}	永井美由紀 ^{2,3}
山根 裕之 ²	佐古亜佑美 ²
玉田 智子 ²	石井 雅人 ²
上野 聖子 ²	奥新 浩晃 ^{2,4}

【目的】 今年度2018年より院内にAST（Antimicrobial Stewardship Team）が組織された。ASが政府の薬剤耐性対策アクションプランの一方策とされる中、当院AST活動の一つとして血培養陽性成人患者に対する抗菌薬使用に介入した。本活動の現状把握と評価により今後の活動に生かすことを目的とする。

【方法】 2018年10～11月で血培養陽性例のAS指標（抗菌薬の選択、投与量等）を後方視的に調査し、介入前と比較検討した。

【結果】 調査期間 2 カ月で血培陽性60例，うち介入27例でのべ57件の提案．主な内容は抗菌薬選択21件，投与量15件，検査提案15件などで，受入は47件（82.4 %）であった．

【考察】 短期の検討ではあるがAST介入によりASプロセス指標は改善傾向がみられた．当院検体の薬剤感受性は良好にて大切にすべく，抗菌薬適正使用を引き続き先生方のご指導ご協力を得て推進し，医療の質および安全の向上に貢献したい．

6. 当院での産後ケア事業の取り組みについて 4 階東病棟

○廣岡 美絵 橋本 麻衣
平田 真美 山田 由貴

産後は母親の心身の状態を整え，児との生活に慣れ親子関係を構築するために大切な期間である．しかし近年，核家族化や高齢出産の増加などを背景に，産後の期間をサポートなしで過ごす母親が増加してきている．孤立した子育てが産後うつや自殺，虐待などの増加につながり社会的な問題となっている．そのため地域で産後のサポートを行う「産後ケア事業」に取り組む市町村が増え，姫路市も2016年度より開始している．当院も産後ケア事業の利用施設として開始年度より参加した．

2018年11月現在で産後ケア事業の利用者は宿泊型14名となった．また2018年度 4 月から通所型サービスも開始し，延べ27名の方が利用している．

当院で実施している産後ケア事業の実際の内容や，総合周産期母子医療センターとして取り組む産後ケアの重要性・今後の課題について報告する．

7. エルトロンボパグによる治療を実施した再生不良性貧血の 6 例

内科²（血液・腫瘍内科¹）

後藤 有基¹ 上田 怜¹
望月 直矢¹ 猪股 知子¹

久保西四郎¹ 平松 靖史¹
奥新 浩晃²

【背景】 本邦では重症再生不良性貧血はウサギ ATG+CsA ± G-CSF が標準治療とされてきたが，2017年 8 月にエルトロンボパグ（レボレード[®]）が使用可能となった．しかし，本邦では血液学的奏功と生存率で劣るウサギ ATGを用いる点，エルトロンボパグの使用時期が ATG 後 2 週間後とされていることが海外とは異なるため臨床経験の蓄積が重要と考える．

【方法】 2017年 8 月～2018年 3 月に当院でエルトロンボパグ治療を受けた再生不良性貧血患者 6 例を対象として後方視的に有効性，安全性を検討する．

【結果】 治療開始 1 カ月において 2 例で血小板数 $>20000/\mu\text{L}$ となり血小板輸血依存を離脱した．治療開始 3 カ月において 3 例に 3 系統の造血改善を認め血小板輸血依存を離脱したが，赤血球輸血依存を離脱したのは 2 例であった．重篤な血液学的毒性として 1 例で治療開始 3 カ月時点で急性骨髄性白血病を発症し治療中止となったが，非血液学的毒性は G2 以下であり安全に使用できた．

【結語】 重症再生不良性貧血に対してウサギ ATG にエルトロンボパグを併用することが有用である症例を経験した．追加治療に関しては非血液学的毒性が少なく安全性の高い治療であると考ええる．

8. 高齢者における浸潤性膀胱癌に対する膀胱全摘除術の検討

泌尿器科

○前田 光毅 上田 進
西川 昌友 楠田 雄司
原口 貴裕 小川 隆義

【目的】 高齢者における浸潤性膀胱癌に対する膀胱全摘手術の成績の検討

【方法】 2008年 4 月から2018年 8 月で，当科において浸潤性膀胱癌に対して膀胱全摘出術お